



Title	日本語とカンボジア語におけるヴォイスの対照研究— 使役・受身を中心に—
Author(s)	Sok, Sovanratha
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105495
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (SOK SOVANRATHA)

論文題名

日本語とカンボジア語におけるヴォイスの対照研究
—使役・受身を中心に—

論文内容の要旨

使役と受身は、ヴォイスと呼ばれる文法概念に属し、前者は主体が他者に行為を起こさせる事態を、後者は主体が他者から動作・作用を受ける事態を表し、対立する意味関係にある。使役は、カンボジア語では ?aoj および $\text{tv}\text{ə}\text{ə}$?aoj によって、日本語では「サセル」によって表される。一方、受身は、カンボジア語では $\text{tr}\text{əw}$ によって、日本語では「ラレル」によって示される。しかし、両言語の使役形式と受身形式が必ずしも一対一対応するわけではない。カンボジア語で ?aoj を含む文が常に日本語の「サセル」に対応するわけではなく、文脈によっては「ラレル」に相当する受動的意味を表すことさえある。例えば、日本語の「ファンに愛されたい」という受身文に対応するカンボジア語の表現では、 $\text{tr}\text{əw}$ ではなく、 ?aoj が用いられるが、使役標識とされる ?aoj が受身的な意味を担う理由は明らかではない。さらに、副詞との共起に関しても両言語で顕著な差異が確認される。日本語では、「わざと」や「不運にも」など意志性／非意志性を標示する副詞は、使役文および受身文の双方と自然に共起できる。一方、カンボジア語では、同様の副詞句は ?aoj や $\text{tv}\text{ə}\text{ə}$?aoj を用いる構文とは共起可能であるが、 $\text{tr}\text{əw}$ を用いる受身構文とは共起しない。これは、カンボジア語における使役と受身の区別（機能的対立）が日本語とは異なる基準にもとづいていることを示唆する。

このような状況を踏まえ、本論文は、日本語とカンボジア語における使役と受身を比較し、両言語における使役と受身の意味的な連続性ととも、動詞体系の根底にある質的な差異を明らかにすることを目的とする。その目的を達成するための過程において、日本語の「サセル」とカンボジア語の $\text{?aoj}/\text{tv}\text{ə}\text{ə}$?aoj 、そして、日本語の「ラレル」とカンボジア語の $\text{tr}\text{əw}$ が、それぞれどのような機能的境界を持ち、どのような条件で対応し得るのかを検討する。また、両言語に共通する特徴に加え、各言語に固有の文法的性質を抽出することで、使役と受身の関係をより体系的に捉えることも目指す。本論文は、7つの章から構成されている。序論となる第1章では、研究の背景、問題提起、本論文の目的を述べた上で、以下の4つの研究課題を提示した。

課題1：日本語の「サセル」とカンボジア語の ?aoj の対応関係を意味的な観点から明確化すること。

課題2：日本語の「ラレル」とカンボジア語の $\text{tr}\text{əw}$ の受身的用法を対照し、その分布および意味制約を明らかにすること。

課題3： ?aoj が受身的に解釈される要因を両言語における使役と受身の意味的連続性の観点から追求すること。

課題4：両言語における動詞分類体系、働きかけ性、意志性などの考察を通して、使役・受身を超える文法構造全体の位置づけを明確化すること。

第2章では、日本語とカンボジア語における使役と受身の形式と意味解釈について、先行研究の知見を整理し、その上で、現状での問題点、特に、当該のヴォイスに焦点を当てた両言語の対照研究が見当たらないこと、そして、カンボジア語における使役と受身の意味的接近に関する研究が皆無であることを指摘した。

第3章では、「サセル」と ?aoj の対照（課題1）に取り組んだ。

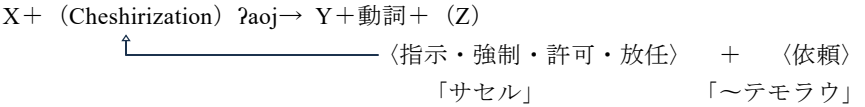
日本語の使役構造： X が Y に (Z を) 動詞サセル

カンボジア語の使役構造： $\text{X} + \text{?aoj} + \text{Y} + \text{動詞} (+\text{Z})$ または $\text{X} + \text{tv}\text{ə}\text{ə} \text{?aoj} + \text{Y} + \text{動詞} (+\text{Z})$

日本語の「サセル」は意志的な用法「強制、許可・許容、放置・放任、説得、指示」だけでなく、無意志的な用法「責任、原因・誘発」も表す、すなわち、使役者の意志性の有無にかかわらず用いられる。それに対して、カンボジア語では使役者における意志の有無が形態的に区別され、「サセル」が表す意志的使役には ?aoj が、非意志的使役には $\text{tv}\text{ə}\text{ə} \text{?aoj}$ が用いられる。この違いは、使役者の意志性がカンボジア語において文法化されていることを示唆している。

また、カンボジア語の $[\text{X} + \text{?aoj} + \text{Y} + \text{動詞} (+\text{Z})]$ の構造において、 ?aoj の直前に使役の様態を表す動詞が生起

できることが観察される。つまり、[X+様態動詞+ʔaoj+Y+動詞(+Z)] のような構造が成立する。これは、ʔaoj 単独の使役文が様態動詞の追加によって拡張されたのではなく、もともと存在していた様態動詞が省略されて、Cheshirization (Haiman 2011) を通じて、当該動詞が有していた「指示」、「強制」、「許可」、「放任」などの機能を ʔaoj が引き継いだ結果であると考えられる。「サセル」と異なり、ʔaoj は「依頼」の機能を担うことがあるが、これは依頼を表す様態動詞が ʔaoj と共起できることから説明できる。日本語ではこのような例は「サセル」よりも「～テモラウ」によって表される。



第4章では、「ラレル」と trəw の比較（課題2）を行った。

日本語の受身構造： X が Y に動詞ラレル

カンボジア語の受身構造： X + trəw + Y + 動詞

日本語の「ラレル」は受身接辞であり、「動作主の不明示」、「被害者の焦点化」、「迷惑感情の表出」など多面的機能を担う。動作主が不明の場合、カンボジア語では受身に対応する trəw 以外にも、不特定の人物を表す kèc (誰か) を主語（動作手）にした能動文を用いることも多い。この「kèc <誰か> + 動詞 + X」という構造で、動作主が背景化・曖昧化され、結果として動作対象（目的語）の変化が前景化・焦点化されることになり、日本語の「ラレル」などの受身文と類似した機能を担うことになる。

- (1) 太郎は財布を盗まれた。
- (2) kèc luoc kaaboop luj kəət
誰か 盗む 財布 彼
<彼は財布を盗まれた> (直訳＝誰かが彼の財布を盗んだ)
- trəw は受身の用法として用いられる他、「評価」や「当然性」や「必然性」を表す用法も併せ持つ点が確認された。「受身」を含め、これらの用法は、主語 X が自発的に行為を実行したのではなく、他者 Y の関与によって事態に巻き込まれるという共通した意味的基盤をもつと提案した。さらに、trəw の受身用法は「外的要因による非能動的变化」という語彙的意味が残存するため、日本語の「ラレル」のように完全には文法化しておらず、意志性のある要素（例：「～たい」や「わざと」）とは共起しにくい。この点は、日本語の受身と異なる重要な特徴として指摘できる。

課題3の使役と受身の意味的接近については、第5章で詳細な考察を行った。まず、ʔaoj がその直前に動詞を伴う「X+V₁+ʔaoj+Y+V₂(+Z)」という構文は、後続する動詞 V₂ に対する Y の自発性と V₁ に基づく X の働きかけ性の度合いによって、①因果的用法、②媒介的用法、③願望的用法の三種に分類できることを示した。

表1：ʔaoj 構文の分類

タイプ	Y の自発性	X の働きかけ性	意味的特徴	日本語対応形式
①因果的用法	×	○	X の行為によって、Y の行為や出来事が生じる	「V2させる」
②媒介的用法	△	△	X の命令・誘導に基づき、Y の意志を介して行為が生じる。	「V2するように V1する」 「V2てもらう」
③願望的用法	○	×	X の意図・感情の表出にとどまり、Y の行為は自由である	「V2してほしい」 「V2するように」

- (3) kpom cool cət ʔaoj kəət sɔɔsəə
私 好む ʔaoj 彼 褒める
[直訳] 私は彼が(私を)褒めるのが好きです。
<彼に褒められるのが好きです>

例(3)では、cool cət <好む> が主語の感情を表す動詞であり、ʔaoj 構文の③願望的用法に分類される。V₁は感情動詞であるため、主語 X に働きかけ性がないため、この用法において使役の意味は生じない。また、V₂の sɔɔsəə <褒める> は他動詞であり、通常、対象となる目的語を伴う。しかし、この例では、目的語（対象）が省略されており、

文脈上その対象は構文全体の主語と同一人物であると解釈される。つまり、出来事の動作が最終的に主節の主語に向かう「帰着性」が認められる。その結果、このʔaoj 構文は受身的解釈が自然となるとの主張を行った。

日本語の「サセル」文においても、出来事の動作が主語に帰着する場合、受身の「ラレル」と意味的に近づくことが見られる。しかし、使役では主語が動作を統制し、受身では主語が動作を受けるという役割の違いは保たれる。

- (4) a. 花子は息子を交通事故で死なせた。
 b. 花子は息子に交通事故で死なれた。

例 (4a) は、「息子が死んだ」出来事が主語「花子」へ責任性を伴って帰属し、帰着性がある点で、例 (4b) という被害の受身に意味的に接近する。ただし、主語について、例 (4a) は統制しきれなかった使役者、例 (4b) は被害者というニュアンス差が存在する。このように、日本語においても、カンボジア語においても、主語への帰着性が使役と受身の境界を連続的で曖昧にする要因であると結論づけられる。

また、行為が主語に帰着し、使役と受動と解釈が併存するという ʔaoj 構文の特性は日本語の「～テモラウ」構文とも類似することも指摘した。

表2：ʔaoj 構文とテモラウ文における使役と受身の意味的接近

主語の働きかけ性：解釈	ʔaoj 構文	テモラウ文
○：使役的	prəʔthəən kromhun tvəə ʔaoj koon caw cəp pəi kromhun	社長は部下に会社を辞めてもらった
△：依頼的	kɾom pəŋ ʔaoj kruu kae saaranaa	先生に論文を見てもらった
×：受身的	kɾom cəŋ ʔaoj muut phək səəsəə	友だちに褒めてもらいたい

続く第6章では、課題4となる、両言語における文法構造全体の位置づけについて論じた。日本語の「モラウ」は受け手としての受益のみならず、受け手の働きかけを含意する能動的性質をもつ。一方、カンボジア語では、対応する動詞 tətɔtuol は受動的行為に限定され、能動的な働きかけがある時は、異なる動詞 jək によって表される。両言語におけるこの差異は、動作主の意志性や働きかけ性が動詞の語彙体系において重要視されるかどうかの違いを示している。

表3：「モラウ」に対応するカンボジア語の表現

	日本語 モラウ	カンボジア語	
		tətɔtuol	jək
能動的な受益	○	×	○
受動的な受益	○	○	×

また、日本語の「モラウ」が補助動詞的に用いられる場合、使役的解釈と受身的解釈の両立が可能であるが、それらの解釈とカンボジア語の ʔaoj 構文および trəw 構文の対応を示すと表4のようになる。ここから授受構文とヴォイス標示が相互補完的な役割を果たしていることが見て取れる。

表4：「～テモラウ」の解釈とカンボジア語の対応

方向性	働きかけ性	解釈	カンボジア語の対応
X→Y	○	使役的	ʔaoj 構文
X→Y→X	△	依頼的	ʔaoj 構文 (+X の帰着性)
X←Y	×	受身的	trəw 構文、ʔaoj 構文の願望的用法

両言語におけるこのような差異は、特定の語彙にのみ見られるわけではない。動詞分類の基準自体が両言語で大きく異なる。日本語が自動詞／他動詞の区別に基づく体系を採るのに対し、カンボジア語では意志動詞／無意志動詞の対立が中心的役割を果たすことを主張した。さらに、意志性の扱いの差異は事象キャンセル現象にも影響する

ことも明らかにした。カンボジア語の動詞にとって、もっとも基本的な意味的特徴は意志性である。意志的な動詞は、動作主の行為の始動に焦点が当てられ、終点の結果性よりも始点の意志性が重要視される。それゆえ、結果の生起は二次的なもので、「＜他動詞（意志動詞）＞したが、＜自動詞＞しなかった」という事象キャンセルは問題なく成立することが導かれる。

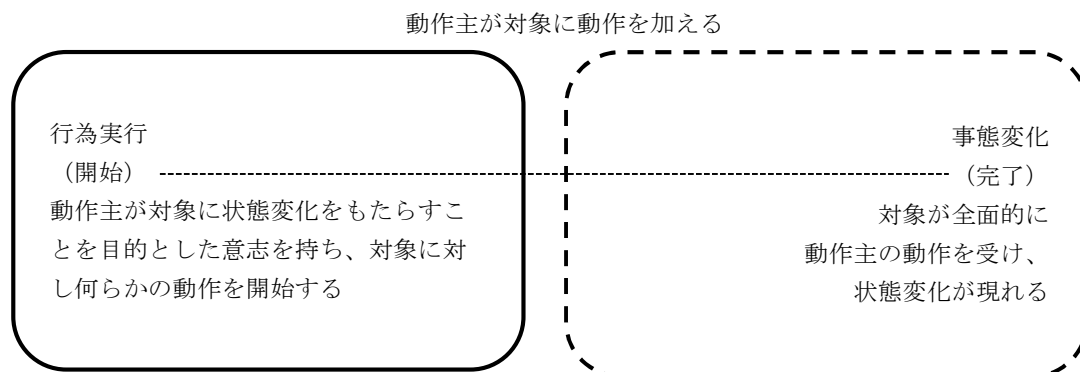


図1：意志性を持つ文の構造

一方、日本語の他動詞は意志性よりも結果性が重要視されるため、動作の始まりよりも動作の終わりに焦点が当てられるため、動作によって目的語に結果がもたらされたことが含意される。それゆえ、日本語では、「＜他動詞＞したが、＜自動詞＞しなかった」という事象キャンセル文は成立しにくいのである。

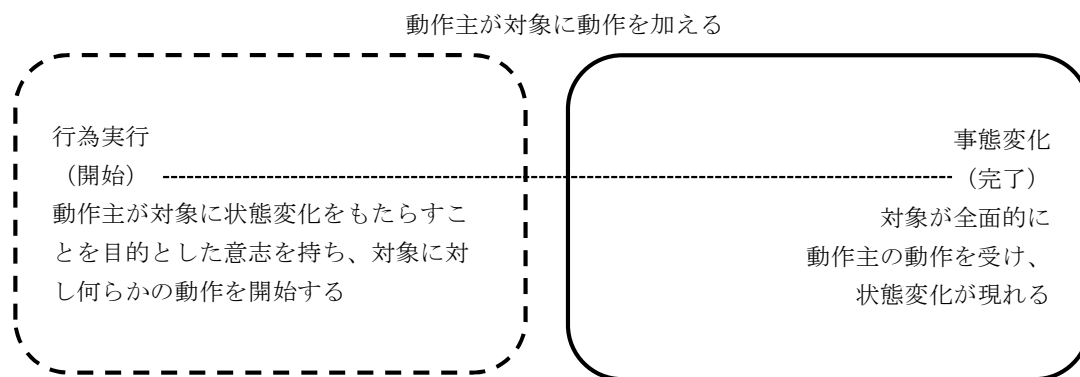


図2：意志性を持たない文の構造

以上の考察から、両言語は、同じように「使役」と「受身」を形式的に区別するにもかかわらず、その背後に根本的な意味体系の差異を有することが明らかとなった。特に、カンボジア語では動詞の意志性がヴォイス解釈の基礎を成すのに対し、日本語では事象構造や自他性がより強い規定力をもつ。この文法基盤の相違は、両言語の使役と受身の連続性を理解する上で不可欠な視座であると結論付けられる。

最後の第7章では、本論文全体を総括し、各章で得られた知見を踏まえて結論と今後の課題を示した。本論文の考察を通じて明らかになった両言語における文法基盤の相違は、カンボジア語を母語とする日本語学習者が日本語の使役・受身を習得する際の困難を理論的に説明する視点を提供することができる。今後、カンボジア語を母語とする日本語学習者における日本語ヴォイス形式の選択傾向や誤用を考察することにより、母語転移の解明やヴォイス体系全体を視野に入れた日本語教育への応用が期待される。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (ソック・ソワンロッター)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査 教 授	岸田 泰浩
	副 査 教 授	今井 忍
	副 査 教 授	山川 太
	副 査 教 授	荘司 育子
	副 査 教 授 (東京外国語大学)	上田 広美

論文審査の結果の要旨

審査対象論文は、日本語とカンボジア語における使役形式（日本語のサセルとカンボジア語の ?aoj および tvàə ?aoj）と受身形式（日本語のラレルとカンボジア語の trəw）を取り上げ、それらの用法上の類似点と相違点を示すとともに、カンボジア語の使役形式 ?aoj が受身的解釈を示す要因を両言語における使役と受身の意味的接近性の視点から考察し、さらに、両言語の動詞体系が異なる意味的特性を基盤にして構築されていることを論じた好論文である。

対象論文は、7つの章から構成されている。第1章では、研究の背景や論文の目的を述べた上で、次の4つの研究課題が提示された：（課題1）サセルとの ?aoj / tvàə ?aoj の対応関係を意味的な観点から明確にすること、（課題2）ラレルと trəw の受身的用法を対照させ、分布および意味制約を明らかにすること、（課題3）?aoj が受身的に解釈される要因を両言語における使役と受身の意味的連続性の観点から追求すること、（課題4）両言語の動詞の語彙体系について、分類、働きかけ性、意志性などの考察を通して文法構造全体の中での位置づけを明確にすること。第2章では、日本語とカンボジア語における使役と受身の形式と意味解釈について先行研究の知見を整理した上で、当該のヴォイスに焦点を当てた両言語の対照研究が見当たらないこと、そして、カンボジア語における使役と受身の意味的接近に関する研究が皆無であることを未解決問題として指摘している。第3章は課題1に取り組み、日本語のサセルは使役者の意志的な用法も無意志的な用法も持ち合わせているが、カンボジア語では意志的使役には ?aoj が、非意志的使役には tvàə ?aoj が用いられることを明らかにした。カンボジア語の両形式の差異が被使役者ではなく、使役者の意志性を基礎としていることを論証した。また、?aoj の使役用法は、直前に生起する「強制、指示、許可」などを表す様態動詞が省略され、Cheshirization (Haiman 2011) によってその機能を?aoj が引き継いだ結果であり、サセルが有しない「依頼」の用法は、その意味を表す様態動詞が ?aoj と共起できることに起因すると主張した。第4章では、「ラレル」と trəw の比較（課題2）が行われた。従来も、動作主が不明の場合、カンボジア語では受身に対応する trəw 以外にも、不特定の人物を表す kèe（誰か）を主語（動作手）にした能動文がよく用いられることが指摘されているが、対象論文では、そのような能動文においては動作主が背景化・曖昧化され、結果として動作対象（目的語）の変化が前景化・焦点化されることになり、日本語の「ラレル」などの受身文と類似した機能を担うことになるという興味深い見解が示された。また、受身以外に当然性や必然性の用法も併せ持つ trəw がその語彙的意味として「外的要因による非能動的变化」を基盤にもつため、日本語のラレルとは異なり、意志性のある要素（「～たい」や「わざと」）とは共起しにくいという説得力のある分析が示された。次いで、課題3の使役と受身の意味的接近については、第5章で詳細な考察がなされた。まず、?aoj がその直前に動詞 V₁ を伴う構文「X+V₁+?aoj+Y+V₂ (+Z)」は、V₁ に基づく X の働きかけ性と動詞 V₂ における Y の自発性との度合いによって、①因果的用法、②媒介的用法、③願望的用法の三種に分類できることが示された。願望的用法における V₁ は感情動詞等であり、主語 X に働きかけ性がないため使役的意味は生じず、さらに、V₂ の目的語（対象）が省略され、文脈上その対象が構文全体の主語 X と同一人物であると解釈される時、つまり、動作が最終的に主節の主語に向かう「帰着性」が認められるとき、?aoj 構文は受身的解釈が生じると論じている。そして、日本語のサセル文においても帰着性が認められると、ラレル文と意味的に近づくことを指摘し、両言語において主語への帰着性が使役と受身の境界を連続的で曖昧にする要因の一つであると結論づけた点は斬新である。第6章では、課題4となる、両言語の文法構造全体における動詞の語彙体系の位置づけについて論じられた。日本語の「モラウ」の受動的受益と能動的受益はカンボジア語では異なる動詞語彙によって、また、補助動詞の「～テモラウ」の使役的解釈と受身的解釈はカンボジア語では働きかけ性の程度に応じて?aoj 構文または trəw

構文によって言い分けられることを指摘し、両言語におけるこの差異は、主語の意志性や働きかけ性が語彙やヴォイスの体系において重要視されるかどうかの違いを示していると論じた。その上で、両言語は、「使役」と「受身」を形式的に区別する点が同じであっても、その背後に根本的な意味体系の差異があり、カンボジア語では動詞の意志性がヴォイス解釈の基礎を成すのに対し、日本語では事象構造や自他性がより強い規定力をもつと主張し、この文法基盤の相違が両言語の使役と受身の連続性を理解する上で不可欠な視座であると結論付けた。この二つの言語に見られる類似点と相違点の根底には異なる文法的原理があり、それが両言語における動詞やヴォイスの振る舞いの異同を生み出しているとする提案は独創的なアイデアと認めることができる。第7章では、論文全体の議論を総括するとともに、この研究がカンボジア人日本語学習者に対する使役や受身の教育にも資する視点を提供できると結んでいる。

日本語に比べると、カンボジア語の文法研究はまだ十分に進展しているとは言い難い。文法研究のテーマとしてはメジャーな部類である使役や受身についても例外ではない。そのような状況の中で、カンボジア語の使役と受身を日本語との対照という視点から考察した本論文の学問的貢献度は高い。それだけに留まらず、この研究の新規性は、特に、カンボジア語学にとって課題3に取り組んだこと、そして、日本語とカンボジア語の対照研究として課題4に取り組んだことにおいて認めることができる。議論の構成も堅実であり、表面的な現象の指摘に留まらず、一般化を目指す姿勢も評価できる。しかしながら、その一方で、改善が必要な点があることも否めない。まず、誤字も少ないとは言えず、議論に影響を与えるものもあるため、推敲不足が惜しまれる。カンボジア語に関しては、多様な議論の中で *ʔaoj* のカテゴリー帰属が不明瞭になっている面がある。また、カンボジア語の例文については、音韻表記等の基準が一定していない点、例文が概して作例のみである点、意味的な異同の精査に際して異なる文型が比較されている点、などに対しては慎重になるべきであった。このような細部の瑕疵があるものの、それらによって論文全体の学術的価値が大幅に損なわれているとは言えず、カンボジア語学や日本語との対照研究を一步前進させた点は強調に値する。

以上のことから、本審査委員会は、全員一致で審査対象論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与する水準に達していると判断し、合格との結論に至った。